

慈濟

ものがたり

ツーチー 2019年3月 267





初心を忘れず

日常生活の至る所が道場であり、
事の縁で心の修行や鍛錬ができ、
どこでも修行することができます。

片時も初心を忘れず、
善の念を持ち続け、福縁を結んで忘れず、
日々、共に菩薩道で精進しましょう。

● 表見返し 文・證嚴法師

訳・済運 撮影・蕭耀華



トルコ難民児童のために設立された「マナヘル難民学校」が、アメリカの教育機関に認証された。卒業生は更に上へ進学できる学歴を持つのである。二〇一八年十一月に行われた「マナヘル国際学校」の除幕式で、生徒は台湾から式に出席した慈済ボランティアに向けてハートマークを作って見せた。(撮影・余自成)

目次

【社論】

貧困から抜け出す希望

慈願／訳 4

【主題報道】

困窮家庭の学生を支援し、

新芽が大樹になるまで扶助しよう

心嫻／訳 8

寄り添いケアは家庭訪問から始まる

惟明／訳 16

逆境を活力に

勝利へ邁進するアスリート

黒川章子／訳 31

【国際援助&教育志業】

子どもたちに笑顔の種を蒔く

黒川由希／訳 44

【特別報道】

マレーシア華僑の心 台湾人の温情

惟明／訳 62

【衲履足跡】

慈悲と智慧とを並行させる

済運／訳 75

【一つ屋根の下】

主婦のライフプラン

葉美娥／訳 80

【證嚴法師のお諭し】

よいことは待てない、
了解したら即刻実行すること

慈願／訳 100

慈済大事記【二月】

済運／訳 107

貧困から抜け出す希望

「もし方向がずれていたら、どんなに富裕の家庭でも優秀な子供を輩出することはできません。自愛する子供であれば、どんなに貧困な家庭で育つても希望はあります」。證嚴法師は常に、貧困家庭の子供に救いの手を差し伸べるということは、風に吹かれて瘦せた土地に落ちたタンポポでも、芽を出し遅しく成長することに喩えられると諭す。

慈濟ボランティアは慈善訪問ケアの過程でよく多くの子供が学習方面において優秀な素質を持っていることを発見している。家庭の経済状況が良くないために、親に負担を掛けまいと思って、学業を疎かにしてアルバイトをする

る子供がいる一方、勉強も運動能力も特に優れた点がない上に才能を発展させようとする志と勇氣に欠けている者もいる。

教育は貧困から抜け出す道であり、貧困家庭の子女は教育を受け、基本学歴があつて初めて、収入の安定した職業に就くことができ、さらに家計を助けることができるのである。また教育は社会階層の移動を促し、貧困からの離脱に役立つ。

しかし、社会構造の変化で教育に不利な傾向になることもある。例えば就職市場の低迷により学歴が低く評価される。或いは今月の月刊で報道したように、生活費や学費のために必要以上にアルバイトしたり、卒業後は又高額な学費ローン返済のプレッシャーが掛かってくる。これらは学習の質を偏らせるだけでなく、教育の目的が歪められ、学生を貧困の中に追いやっている。

私たちは教育は今でも貧困を翻すことができると信じている。しかしそれには、社会が共同で関心を持つことが必要である。今月の月刊報道の中には、慈済が辺境の暗がりでも生活している学生たちを長年支援していることを報道しているが、二〇一八年元旦から九月までの統計によると、学費補助を受けた者は延べ六千八百人余りで、新芽奨学金は八千五百人以上に支給している。後者は全台湾の学校で困難な生活に挫けず、優秀な成績を取っている弱者家庭の子女を表彰し、励ましている。

それ以外に慈済は重大災害の後、例えば二〇〇八年の世界金融危機が引き起こした大量失業が出た時や二〇〇九年の台風モラコット被害の時、「安心助学」計画を立て、家計困難に陥っている学生の家庭訪問と補助を行っている。同様な「助学」概念は海外にも広まっている。

ある新芽奨学金を受けた学生は表彰台で、学費補助だけでなく、慈済人が与えてくれた生活上の支援も生活のプレッシャーに耐える原動力になった、と語った。そして、反抗期の子供が目標を失っていた時、慈済人の付き添いで人生の目標を見つけた人もいた。補助を受けた多くの学生が、課外時間にボランティア活動に参加して、人助けできることを期待している。

法師は「支援を受けるのは一時的で、生涯にわたるものではありません。人助けの目標は、支援される人が自立して他の人を助けるようになることです」と言っている。教育の目的は、人生に立ち向かう能力を養うことで自分を守ると共に他人を利する人間を養成することである。学生が支援という模範的な励ましを得れば、後日、希望と力を他人に与えることができ、それが貧困を翻す希望の持つ意義なのである。

（慈済月刊六二六期より）

困窮家庭の学生を支援し

新芽が大樹になるまで扶助しよう

慈済が支給する就学補助金、その価値は、「貧しい家庭でありながら志のある」数万人もの子供を支援しているところにある。

就学が困難な状況に立たされた際に、諦めるという選択肢を選ばずにすむよう、厳しい環境の中で成長する新芽が、将来家庭の大黒柱として未来を背負うことを願っている。



文・葉子豪 撮影・顔霖沼 訳・心嬖

「お宅の子供さんはとても優秀なのだから勉強を続けさせなくてはなりませんよ!」というセリフを昔のドラマではよく耳にしたものである。そのあ

とは学校の先生が貧困農家である生徒の家を訪ねて行き、子供が学校を中退しないように熱心に親を説得するという展開だ。今日、台湾社会の経済力も向上し、親たちは教育の大切さを理解するようになった。そして「我が子が知識を身に付け、安定した生活ができるように」と願うようになったので、今では大部分の子供も大学まで勉強ができる。しかし、まだ数万人の学生は家計を助けるために高

額な学費ローンや過度のアルバイトにさらされている。

台湾評鑑協会が二〇一七年に大学と専門学校の新入生に対して調査した結果、新入生の五人に一人は学費ローンを組んで学費などに当てていることが分かった。(註)私立大学の一学期の学費約五萬元(約一八万円)から計算すれば、一人の大学生は、四年間八学期の学費ローンの総額が四十萬元を超える。

教育部(文部省)が二〇一八年八月に公表した「学費ローンとゆとり返済」というスキームによると、台湾全体では八十七万人が学費ローンを背負っている

そうだ。一方、現在学費ローンを返済している五十万人の社会人の中で、ゆとり返済の資格を得たのは七万八千人だけにとどまり、「借金で勉強する」という事態が若い世代にとって大きな重荷になっているのである。

高等教育の学費は、貧困や病氣、片親、祖父母養育家庭など、数多くの生活困窮者家庭の高校生や大学生にとって相対的に負担となってくる。彼らの子供は小さい時から休み無く働く両親の姿を目の当たりにし、中には病弱な年長者の面倒をみている小中学生の子供も少なくないようだ。家庭のサポートが欠けている子ど

もの学習の道のりは他人より困難である。「家扶基金会」(貧しい家庭の子どもを援助する基金会)が二〇一五年に行った調査によると、子供が高校や技能学校に在学中の生活困窮者家庭の収入は毎月二萬元(約七万二千元)未満で、そのうち七十三%の家庭が子供の学費を払えない状況にあるそうだ。また、六十%以上の対象学生は、「アルバイトをして勉強に影響がでた」と回答した。

子供の就学困難は家庭の崩壊がその背後の原因となっていることが多い。家庭が自ら我が子の教育困難を解決できないとしたら、社会的に奨学金等の



助成制度により支援する必要があるのではないか。

慈済が手を差し伸べて 就学の道を確保

公共部門、民間団体、学校及び心ある人は生活困窮者家庭の子供に様々な資金を投入している。インターネットで検索してみれば、奨学金や助成制度に関する情報がすぐ入手できる。慈済にも奨学金制度がある。それは経済面の支援だけではなく地域のボランティアネットワークとも連携して、「全ての進路、全家庭の

全ての人に」全面的なサポートをしており、子供達にとって最大の拠り所になっている。

町内会長と学校の先生は、必要に応じて慈済基金会と連絡をとり、ケアケースを紹介することになっている。失業や疾病あるいは事故など、紹介した家庭に變事があつた場合も、各地域の慈済ボランティアはその通報を受けると直ちに訪問を行っている。

苦しんでいる世帯に対して、ボランティアは何か必要かを判断し、毎月の生活費を支給したり医療費を助成したりして当面の問題を解決する。そして寄り添

いと助言をしながら助学金を支給し、子供が安心して学校に通えることを確認する。その後も「新芽奨学金」という支給制度で補習や習い事に通う事をサポートし、自らを高めるよう奨励している。

台中の「医学部の兄弟」も慈済の奨助学金制度の恩恵を受けた学生だ。現在医学部五年生の兄、林胤廷は「三年前僕が二年生のとき、弟はちょうど漢方医学部に入学しました。しかしながら父は失業中で、祖母もがんを患っているため、僕と弟は慈済の支援を受けました」と述べた。

兄弟の事情を知った慈済ボランティアは家族を訪ねた。面談をしてから林家を

長期ケア世帯の対象に認定し、毎月祖母に生活費と医療費を助成した。それ以外に兄弟にはその学期の学費全額を支給した。

その後、台中のボランティアは兄弟を引続き支援しようとしたが、婉曲に辞退されたそうだ。「慈済の浄財は五百元や百元と募金して集められたものです。私たちは他の学費ローンを借りても卒業して返済する能力がありますので、支援は他の人に回してください」と林胤廷が言った。

最も困難な学期が過ぎると兄弟は学費ローンを組むことにしたのだ。そして、



もはや家庭教師として働く必要がなくなると、優秀な成績により学校や社会の奨学金を獲得して生活費に当てた。その志は台中の慈済人の心を動かし、三年連続して「新芽奨学金」対象者に認定され、さらに二〇一八年度の中部地区人品模範にも推薦されたのだった。

二人とも優秀で、常にクラスのトップですし試験の得点もほぼ満点を修めています。また学校が支給した奨学金をお祖母さんの義歯の費用にあてているのです。そのような優秀な学生に新芽奨学金を支給するのは当前でしょう。それに、ここ二年間慈済の『骨髓バンクのための

血液検査』にもボランティアとして熱心に参加していました」と林家をケアするボランティア朱盧素貞さんが再三褒め称えた。

新芽の向上を励ます五つの賞

二〇〇七年から慈済は毎年、在宅ケア世帯と長期ケア世帯の子供に新芽奨学金の支給を開始し、その人数は今までに延べ六万人以上にのぼる。二〇一八年度は様々な学校のおよそ八千五百余名の生徒や学生が新芽奨学金を受けた。支給項目には、学業成績、孝行、特別なパフォー

マンス、皆勤、成績進歩の五つがあり、その総額は五千萬元を超える。

奨学金は具体的な奨励であり、日頃行われる慈済ボランティアの見返りを求めない奉仕とケアのもたらす価値は、奨学金でも遠く及ばないものがあることをここで明記しておかなければならない。

慈済が考える奨励の最も価値のある点というのは、数万人もの「家は貧しくても志を遂げたい」子供たちに支援ができることなのである。彼らが就学の困難に直面し途方に暮れている時に、進学を諦めるという選択をさせずにすむことが何よりの喜びなのである。勉学の時期を逃

さず知識をしつかりと身に付け、前向きに善を尽くして自分を成就するように励ましているのだ。

このように慈済人は、常に生活困窮者家庭とその子供に寄り添い、自立するまで尽力する。それは、単なる一人や一つの家庭に手を差しのべて貧困から救うためだけでない。家庭の新芽はやがて大樹に成長し、家庭の大黒柱となり、将来は世界の人たちと共に未来を背負うのだということを、知っているからなのである。

註：『評鑑双月刊』七十四期（二〇一八年七月號）に発表した。

（慈済月刊六二六期より）



寄り添いケアは

家庭訪問から始まる



家庭の事情はそれぞれだが、生活費、医療費、学費などは全て貧しい家庭にとっての難題である。慈済のボランティアは長期にわたって寄り添うだけではなく、生活の一助となつて、学齢期の子供が大切な勉学の道を順調に歩めるよう支援している。

文・葉子豪 撮影・顔霖沼 訳・惟明

「家」計を支える大黒柱を無くしたために子供まで教育の機会を失うことは、その家

庭だけの問題ではなく将来の社会問題にもなりかねません」慈済の草創期から證嚴法師は、特に貧しい家庭の子供達の問題を重視してこられた。

一九六十年代から七十年代にかけて慈済

●三重（新北市三重区）慈済ボランティアは一家の大黒柱を事故でなくした遺族の家計を心配し、音楽学部の学生である呉スー（中央、黒い着衣）と母親（右）の家庭を何度も訪問した。



ボランティアは貧しい家庭を支援してきた。生活費、学費の問題を解決するだけでなく、子供達がプライドを持って快く通学できるようにと、当時では最高級の素材である「テトロン生地の子生服」を支給した。

近年台湾は物質面で豊かになり、貧しい家庭の子供達でも破れた服を着ることはなくなった。しかし、一見何とか家計をやり繰りしていても依然として各家庭が各々の事情を抱えており、生活費、医療費、子供の学費など全てが難題になっている。

慈済の各支部や事務所は、通報を受けると直ちにボランティアを動員し、支援

を必要とする家庭を訪問する。そして状況を見計らって、経済面と物質面、そして社会面でも支援する。熱心なボランティアは主に経済面を担当し、その家庭の子供が大切な勉学の道を着実に歩めるように寄り添う。

簡単に学業を放棄したくない

「いつから風邪を引いていましたか？」
「月曜日あたりでした」「鼻水は出ていますか」呉スー（馬へんに肅）の声が変わると気づいたボランティアの孫美琴が慌てて尋ねた。

「彼は食生活が不規則なのです。夜の

九時、十時に帰宅してから夕食を食べるのだそうです」毎日バイクで三重区から陽明山の学校に通学することに触れるとスーの母親は心が痛んだようで、少し前に亡くなった夫のことも思い出してまた悲しくなったようだった。

音楽やオーディオに興味を持っていたご主人は趣味を仕事にし、オーディオ販売店を開業していた。スーは小さい頃から父親の影響を受けて、音楽に興味を持ち始めた。その後、商売が思うようにいかなくなり、ご主人は店を畳み、自宅中古オーディオの売買や修理をするようになった。収入は先細り不安定な上に、母親は網膜症を患い、視力に障害を持つ

ようになった。また家も持家ではなく借家だったので、低所得世帯になった。高い音楽教室に通えなくても、父親からプレゼントされたキーボードを独学で練習し、スーは学科と実技のテストに合格、音楽学部に入學した。その後も優秀な成績と数々の賞で先生達に認められた。

二〇一八年六月下旬、父親は交通事故で亡くなった。母親とスーが途方に暮れていたその時、「恩師が自ら願い出て」支援の手を差し伸べた。「スーの中学時代の教師はかねてから彼の家族と親しくしてきました。彼が父親を事故で亡くしたことを知り、慈済に連絡してくれたのです」その後、孫美琴、張玉環などのボ



●慈済の三重静思堂で行った奨学金の贈与式で、呉スーはアフリカ・ドラムを披露した。

ランティアが速やかに家庭訪問をした。

母親の視力が悪かったため、人が訪ねてくる時はいつも父親が側に寄り添い手を握ってあげることで安心感を与えていたのだが、

今では彼が母親に寄り添うようになった。大学二年生の彼がこれだけの思いやりを持っていることに、ボランティア達は感動させられた。



「この子はまた十九歳なのに、大人のようにしっかりしています。彼は父親が突然いなくなっただけで氣力をなくしたり将来を見失ったりしませんでした。むしろ、悲しみを胸に収め、母親と妹の支

えになっていました」と孫美琴が付け加えた。父親が亡くなった後、スーは家業を継いで得意先のオーディオの修理を請け負ったり、父親が残したオーディオを処分したりしながら、家計を助ける為に、休みの日にはパークションのインストラクターのアルバイトをしている。彼は優秀な学業成績と音楽パフォーマンスで二〇一八年の新芽奨学金の「学業部門賞」を受賞した。

「受賞当日のことなのだけど、アフリカ・ドラムのパフォーマンスをしてから、あなた自身の体験を皆に話してほしいのです」と張玉環は話しかけた。三重区の慈済新芽奨学金の表彰式当日、スーに「品

格の模範」としてステージに上がって学生達を励ましてほしいと考えていたのだ。「大丈夫です」とスーは答えた。

父親が事故死した後、低所得世帯ということで賠償金と学費の減免があったが、短期的には生活と就学には問題がなかった。「また来ますから貴方がちゃんと卒業し就職して、家庭を守るようになることを願っています」と張玉環がスーに話した。

大学や高校に進学している貧しい家庭の子供にとって、学費と下宿の生活費は重い負担になっている。子供達が学業を諦めないように、ボランティアは家庭訪問の際、この点について特に

慈済の寄り添いケア・困窮家庭支援



2018年1月－9月の統計



長期支援
延べ96,359人



在宅ケア
延べ117,729人



学費補助
延べ6,837人



新芽奨学金
8,528人

気を配っている。

「二〇〇八年リーマン・ショックの時、慈済は子供達が安心して就学できるように必要に応じて全額の奨学金を出す計画がありました」「この前のケースがそうでしたから、スーも高校生の時から一学期の授業料一万五千元を慈済がずっと肩代わりしてきました。今ではもう大学三年生ですよ！」と張玉環が説明した。

無料の補習授業で「学力を補う」

大学、高校の高額な学費と対照に小中学校では、学費は政府が負担する上に一般の雇用主は十六才以下の子供を雇用し

ないため、貧しい家庭の子供達が「貧しさで教育の機会を喪失」「アルバイトで勉強が遅れる」などの状況はそう顕著ではない。むしろ、放課後の団らんの欠如が心配される。

文字の読めない祖父母や中国語の分からない外国籍の母親だと子供の学業を指導することはできない。力仕事に従事している多くの親達は収入が多くないために働く時間が長く、子供が外で遊び放題になったり、スマホに取り憑かれて家に閉じこもっていることは良くないと知っ

ても一緒にいてあげる時間がなく、放課後のサークル活動に参加させるお金の余裕もない場合がある。現状を変える

のも難しさがあるようだ。
慈済は台北、新北、台中、台南、花蓮、台東など十の県と市に二十七ヶ所の無料補習クラスを設け、在宅支援世帯と長期支援世帯の子供達の「学力を補う」活動をしている。

中でも、台東慈済新芽補習クラスはとて

ちも特色がある。毎週土曜日の朝、子供達が登校して最初にするのは、教科書や宿題を出すことではなく、ボランティア達が用意した朝食を食べること。授業の後



と慈済教師会の李岳青教諭が言う。子供達は平日は学校の給食があるが、土曜日は両親も祖父母も仕事があるので、昼ご飯の用意ができない。補習クラスにすれば、食事の面倒をみてあげられるので、祖母が孫に「行きなさい、行かないと食べるものがありませんよ」と勧めているそうだ。

「古きをたずねて新しきを知る」と言われるように補習の重点は復習と予習にある。学校の宿題をやり、できない所があれば習得する。宿題を指導する先生や慈青は子供達を学年ごとにグループ分けし、指導に当たる。

「教えて！」と小さい女の子が大学生のお姉ちゃんに問題を解いてもらおうとした。お姉ちゃんはまず自分でトライしてみようとした。「効果の効……君は短く書き過ぎてない？大丈夫？」隣の教室では小学の教師である張福松が学生の誤字を指摘し、書き直しするよう指示していた。

一時間の宿題指導を受けた後、子供達は別の教室に移り、英語の勉強を始めた。アメリカから帰国したボランティアの後に続いて英訳した静思語を朗読する。「いいことを話す Speak kind words ! いいことを思う Think good……」

補習授業の時間は長くないが、投入する時間とマンパワーは少なくない。土曜日に補習授業をする場合、台東大学の慈青部（註一）は前週末から予定を申請し、木曜日の午後五時前に参加できる部員の名簿を提出するのだと窓口を担当する張福松先生が教えてくれた。

●教育資金に欠けている貧しい家庭の子供達を助ける為に、台東の慈済ボランティアは慈済教師会（註二）、慈青（註三）などの人的資源を活用し、補習授業を始めた。そこでは、アメリカから帰国したボランティアが英語の授業をしている。

- 註一 慈青部：慈青のサークル。
註二 教師会：慈済の観念を教育に取り入れれ教えている教師の集まり。
註三 慈青：大学・専門学校の慈済サークルに入っている学生



宿題を指導する大学生のほか、授業に参加する小中学生の人数、そして送迎が必要な生徒数、食事をする人数などを確認し、地域のボランティアに知らせている。「木曜日の午後までに知らせないと、用意が間に合いません」。

土曜日の早朝、ほかの学生がまだ熟睡している時間に慈青達は集合し、彼らを知本キャンパスから台東市内にある精思堂へ送迎するボランティアを待つ。

「学生寮にいてもスマホで暇をつぶすだけなので、もっと有意義なことをした方がマシ」と台東大学の慈青隊員傳詞源が言った。朝七時に起きてから、補習授業を終えて学校に戻るのは午後二時。「活

動時間」は短くないが彼は疲れを感じない。「私は高雄の実家に帰っている時を除き、毎週子供達の相手をしています。もう、三年間も続けています」

週一回だけの補習では確かに子供達の成績を飛躍的に向上させることは不可能だが、彼らの体、智能そして心の養分を補うだけでも努力に値する。

「これによって、彼らがもつと対人関係に信頼感を持ち、社会に忘れられないことを分かってくれば、私はこの子供達にとって少しは助けになれたのではないかと思います」と李岳青教諭が言う。助けを受けた子供たちも期待を裏切ることはなかった。

小学校三年の時からボランティアの補習授業を受けていた男の子はもう中学校三年生だ。彼は教師や慈青から指導を受け続けると同時に「クラス委員」、「サービス委員」に選ばれ、先生や慈青が教室の飾り付けをするのを手伝っている。

「長い間、私は彼が自分から来てくれること、来て他人のために何かすること、最大の報いに思っています」と李岳青が言った。

保護者は安心、子供は大喜び

ボランティアは、席に座ったままの補習授業だけではなく、体を十分動かせる

時間を用意した。貧しい家庭の子女を各地域の「慈済青少年バスケットチーム」に招き入れた。
今、台湾全土に十八のチームがあるが、今学期の板橋チームには九十三名の部員がいる。その大半は一般家庭の子供だが、慈済が支援している家庭の子供は少ないながらも入っている。皆が同じユニフォームを着て誇りを持って戦う時は、身分と出身の区別もなく、全員の心が一つのチームに溶け込んでいた。

「ここには慈済のボランティアがいるので、子供が非行に走る心配はありません」と選手の保護者である阿明は慈済を信用する理由を述べた。阿明は重度の





●慈濟青少年バスケット・ファミリーは幅広く大衆の参加を呼び掛け、家庭の背景を問わず、子供達はコーチについて学び、体を鍛えている。

脊髄性小児麻痺に侵され、移動は車椅子に頼らざるをえない。数年前に彼の事情は慈濟に報告されたが、阿明は慈濟からの金銭的な助けを拒んだ。しかし、定期的な家庭訪問を受け入れ、当時はまだ小学生だった息子をバスケット・チームに入れた。あつという間に六年が過ぎ、その子はもう高校一年生である。

「コーチは熱心で、色々なプレーのテクニクを教えてくださいます。他の場所では一人で練習するしかありません」

一人息子が慈濟に見守られ、バスケットで体を鍛えるのを、とても安心して見ていられると阿明はいう。長い間慈濟の支援を受けてきた祖母も、小学四

年生の孫が慈濟バスケットチームに参加してから見違えるように変わり、「半年前からここでプレーしています。以前は背が低かったのですが、今は背が伸び、健康になりました」と言った。

板橋の慈濟バスケットチームの総責任者であるボランティアの呂福堯はこう語る。板橋のチームは毎週末朝江翠中学校のスポーツ・センターで練習している。コーチはキャセイ女子バスケット部の元コーチで、他にもプロ選手数名にお願いしているが、その全員が無償で奉仕している。慈濟人医会（註四）のボランティア

註四 慈濟人医会：慈濟の医療人員によるボランティア団体



アもコートのそばで待機し、トレーナー役を努めている。

「運動で汗を流すと、新陳代謝を促進するだけでなく、気持ちを落ち着かせる効果もあります」「我々は子供達に付き添い、その成長を見るだけで楽しいものです」と柔道を学んだことのある呂福堯がボランティア達の奉仕を肯定し、歓迎しながら言った。

● 少子化・高齢化の進行が著しい二十一世紀、子供一人一人が担う責任は今の中・壮年よりも格段に重い。

慈済の低所得家庭に対する教育支援

は、幼稚園から大学院まで幅広くカバーしているが、各種教育支援、学費補助とサークル活動のアレンジなどを通して目指しているのは、都市と農村の地域格差を縮め、教育資金を補うことと、子供達が順調に学業を終了し、自立して、思いやりという美德を備え、国家社会に貢献できる人材に育つことである。

長年の努力の結果、喜ばしい成果が得られている。慈済ボランティア達はこの縁を惜しみながら、各方面からの援助を活用し、もつと多くの子供が苦境から離脱できるような手を差し伸べ、指導を続けながら見守っている。（慈済月刊六二六期より）

新芽奨学金受賞者

逆境を活力に

勝利へ邁進するアスリート

「他人にあるものが自分にはないが、

自分にあるものを他人が認めてくれるとは限らない」。

楊子豪は家庭の事情にこだわらず、

むしろ逆境を活力に変えて前進し、フィールドで勝利を目指す。

陸

上競技場のフィールドで七・二六

キロの砲丸を持ち上げる。楊子豪

が平日の練習でいつも行う動作だ。全身

の筋肉よ、さあ爆発だ！重たい砲丸が空

中で一筋の放物線を描き、着地。スタッ

フが駆けつけて距離を測定し、記録が発

表されるのは間もない。

砲丸投げ種目で全国五位の記録を持つ





栄光の影に困窮の時代あり

彼は、二〇一八年の「新北市杯全国陸上選手権」では十一・〇五Mを投げた。五位ではあったが實力を出せた大会だった。だが大事なことは、一つでも多くの試合に出場して経験を積み、二〇二〇年東京オリンピックに出場するという夢に近づくことだという。

「代表選手になるためには二〇一九年の国体で三位以内に入らなければなりません」と楊子豪は次の目標を語る。「練習と試合経験を積み重ねていきたいです」

他のトップアスリートがそうであるよ

うに、楊子豪も全国五位になる以前に数々の大会で入賞しメダルを獲得している。そして台北市立大学大学院運動教育学科に進むとライフガードをはじめ、水泳コーチ、バスケットボールコーチ、AFAA認定フィットネスインストラクターといった資格を取得した。

積極的に試合に参加したり資格に挑戦したりする以外に、彼は弱者家庭の子供達に関心を寄せている。二〇一八年四月、明新科技大学スポーツマネージメント学科に入学すると、卒業前の最後の学期に

●砲丸投げが楊子豪の得意種目だ。一年三百日を練習に費やし、瞬発力を鍛え、記録更新を目指す。



先生と同級生とともに教育部（日本の文科省にあたる）体育署の水泳指導チームに参加し、移動式プールを使用して新潟県尖石郡の山間部、海拔七百メートルにある玉峰小学校で水泳教室を開催した。

「子供達に水の中はどんな所なのか、そして自分の命を自分で守ることを教えています」子供達は楽しみながら学んでくれたので、教えている側も共に喜びを感じたそうだ。「自分たちも達成感がありました」

これだけのメダルと資格証書が楊子豪の努力と實力を照明する。しかし汗と栄

光の影には生活が困窮した時期があった。

「若い時はハイヒールをはいていたのですが、今はそれでは歩けません」母親は感慨深げに昔を思い出して言う。軽度の小児麻痺を患い、以前は歩くこともできていたのだが六十歳の頃には杖が手放せなくなったそうだ。

母親は保険会社で働いて母子家庭を支え、楊子豪と娘の楊亜ティ（女へんに亭）を育てて来た。慈済委員として慈善献金も続けている人だったが、中年を過ぎた頃に両足の筋肉が衰え、歩行困難になってしまった。母親の体の異変はすぐに一家を苦境に陥れたので、楊亜

ティはいたたまれず慈済へ援助を願ったのだった。

楊一家をケアしている高麗ナ（女へんに那）は、その時子供達は商業学校と中学三年生でまだ未成年であり、困難な様子が伝わってきたという。

奨学金を善用 練習器材を揃える

慈済は二〇一二年に楊家をケア世帯に認定した。同時期に県政府からも低所得者として登記されたので、毎月生活補助を受け、子供達の学費は免除になった。慈済は定期的に訪問し、物資の援助と必

要な時に補助を行った。母親に障害者用バイクを購入して交通の不便を解決し、就学面で相談があれば補助をした。

二〇一六年には状況が代わり、低所得者の認定が取り消され、生活補助と学費免除が受けられなくなってしまった。急な事だったので、子豪と姉はまず友人に学費を借り、慈済も長期ケア世帯に認定し直して定期訪問以外に毎月七千元を補助することにしたのである。

長く一緒に過ごすうちに、ボランティア達は楊子豪に対し、なんと前向きな子だろうと深い印象を持つようになった。「向上心が強い子ですよ。生活が苦しい





●楊子豪は代表選手を目指して大学院の授業の合間にウエイトトレーニング室に通い、筋力増強に取り組んでいる。

とネガティブになる子供もいますが、彼はいつも前を見えています。『他の人にあるものが自分になくても、自分にあるものを他の人が持っているとは限らない』とまで言いましたから」と高さんも賞賛している。楊子豪は早くからスポーツの方面に進むことを決め、二〇一四年商業高校を卒業すると明新科技大学スポーツマネージメント学科に入学して正式に学び始め、試合でも頭角を表し始めた。

高一の頃から毎年慈済新芽奨学金の申請が認定されたことは、母親を最も喜ばせた。入学してからその親孝行で温かい品行が認められ、宜蘭の慈済支部では

奨学金の中の孝行賞に選出した。大学進学後は自分の好きな事を進む道に選び、成績を伸ばしたので、学習領域賞を以て彼を励ました。

息子が日の当たる場所へと邁進し、そして慈済から認められた姿を見て、母親はやっと大きな肩の荷を降ろした気持ちになったという。「あの子には悪い道に入ったり学校を中退しなければそれだいいと思ってきました。こんな変わり方をするとは思っていませんでした」



●楊子豪は陸上砲丸投げで全国第5位の記録を持ち、これまでに数々のメダルを獲得しながら自己ベスト更新を目指してきた。

高さんが内緒ですよと教えてくれたことがある。「お母さんは子豪くんが試合に出るたびに、どんな賞をとったか私たちに教えてくれるのです。自慢の息子なんです」

楊子豪と同じように新芽奨学生である姉の楊亞婷は、その支援で本当に助かっていると言った。子豪も「僕はスポーツ選手で何時間も練習しなければならぬため、他の人よりもアルバイトしてお金を稼ぐ時間が少ないのです。その奨学金のお陰で、練習に使う靴や服を買ったり、緊急用に使うこともできました」と語った。

慈済の援助で 子供は落ち着き夢を追う

大学に通いながら校内でアルバイトをした楊子豪だが、授業がない時間には他の学科の事務所にも出かけて手伝いをし生活費を稼いだ。体育学科でも、一学期に百二十時間と少なめではあるがアルバイトをしながら授業と練習に打ち込んでいた。

「学科事務所では八時から十時まで授業がないとその二時間だけバイトが出来るのですが、校外のバイト先では、二三時間しか働けず、長期的に来てくれ

ない社員を雇ってくれるところはありませんから」。

科大を卒業した彼は正直にこう言った。同級生には学校が終わると直ぐにアルバイトに通い、昼間の授業に集中できなくなる学生もいた。自分はアルバイトが授業と練習に影響しなかったので幸せだと思ったそうだ。「そうでなければ、好きなこと、スポーツを諦めるしかありませんでした」。

新芽奨学金とアルバイト代のほか、彼と姉は銀行に学資ローンを申請し、一学期に四万円を借りて生活した。計算してみると、大学四年間と大学院の間





の借入金額は二人で合計三十万以上になった。就職後この元金と利息を合わせて毎月数千円を返済するのである。

返済は当然の責任と義務だと、二人はすでに心の準備をしていた。現在大学院生の姉は、「私は高校一年の時からローンを組んでいました。返済は当然のことですし、私たちにとっても社会を学ぶ機会だと思っています」

自立したいという意志と、慈済にこれ以上負担をかけたくないという善の思

いから、二人は慈済を頼らず、自分たちでローンを申請したのである。ローンという負担を背負っても、楊子豪は慈済に対し感謝の気持ちを持ち続けている。彼に将来の心配をさせずスポーツへの理想を貫くよう導いてくれたのが慈済なのだ。

二〇一八年全国新芽奨学金給付式典の際、彼は宜蘭慈済支部へこのように挨拶した。「師姑師伯スーグーの皆様、本当に有難うございました。自分が宜蘭を留守にしている時、皆様が毎月実家に来て支援して下さいったことは、僕にとって最大のサポートでした！」

卑屈にならず
無限の可能性を発揮する

学習態度、学科とスポーツのすべてにおいて優秀な成績を修めた後、大学院へと進学した楊子豪は、新芽奨学金学習成就賞に輝いただけでなく、宜蘭地区でその年の模範奨学生にも選ばれた。同じ新芽奨学生達に新たな道を示したと言える。「今日はお伝えしたいことがあります。

『諦めないように』は毎日のように聞く

● 試合を終えて宜蘭の実家に戻った楊子豪。母親（中）、姉（右）との1枚。姉も何度も慈済新芽奨学金を支給されるほど成績優秀である。



言葉ですが、私が言いたいのは『諦める』ことです。何を諦めるか、それは大切な事を一つやり遂げるために、娯楽の時間を諦めるのです。自分を取り巻く無駄を捨てる、それはしばらく休むのと同じです。自分のしたいことをやり遂げるのです」。

世の中に楽をして得られるものはない。一等賞の影にはどれほど多くの汗と涙にくれた時間が隠れていることか。一年の三百日を練習につき込み、慈済の援助を受け取り、楊子豪は記録を更新してきた。自分にできたことは、誰にでもできると彼は信じている。

「僕の夢はこの道の先にあります。一歩進むことができたので、努力を続けます」後輩の奨学生に対し、家庭の事情で卑屈になることなく、人にどう思われるかなど気にせず、弱い気持ちを活力に変えることが大切なのだと呼びかけた。「僕自身がやってみればきつと伝わるでしょう。皆さんにも無限の可能性があるということが！」

（慈済月刊六二六期より）

●競技場での1分間の成績は長年貫き通した努力が基礎になっているのである。彼は新芽の後輩達にも卑屈にならず娯楽に溺れず自分の道を進む努力をするよう選手経験をいかして励ましている。



トルコ国内のシリア難民支援

子どもたちに**笑顔**の種を蒔く

四年前、慈済人は街で学校へ通えないシリア難民の子どもと出会い、彼らのためのマナヘル学校を創設し、子どもたちの家庭も支援した。学校の運営には困難が付きまとい、一度は閉鎖の危機にも瀕したが、奇跡的に国際教育機関の認証を獲得し、生徒は別の国でも正式な学歴を有することを認められ、進学できるようになった。シリア人ボランティアは、子どもたちに笑顔の種を蒔いてくれた慈済人の努力に心から感謝していると話した。



● マナヘル国際学校（
Manahil Syria school）の生徒
が慈済ボランティアに向けて両手
でハートマークを作って見せた。
（撮影・Mohammed al Jamaal）

慈

済トルコ連絡所は二〇一四年からシリア難民への支援を開始し、現在までに延べ八十万人近くをサポートしてきた。支援の範囲は慈善、医療、教育などに渡るが、これらは胡光中師兄、余自成師兄、周如意師姉の三名がいなければ決して実現することはできなかっただろう。しかし二〇一八年十一月、トルコでの救援物資配付への参加後、彼ら三人だけで実現できたわけでもないことを実感した。

慈善志業では、毎月六千世帯以上へ救援物資配付を行う。物資配布の前には家庭訪問や個別案件の記録等の事務作業もある。医療志業の施療センターの一ヶ月

の診察数は延べ八千人以上に上り、その後患者を現地の病院へ紹介する手配を行う。教育志業のマナヘル学校には三千人以上の生徒がおり、小学校から高校までの正規教育以外に、休日の非識字者向け成人クラス、トルコ語クラス、アラビア語クラス、『コーラン』クラスがある。

慈済花蓮本部とともに、三名の慈済ボランティアの背後で膨大な作業をサポートするのは、二百名余りのシリア人ボランティアだ。

慈済の組織は三十名の主婦から始まった。台湾だけでなく、海外の慈済ボランティアも多くは女性である。しかしトルコで私たちが接したシリアボランティア

●シリア難民慈済生活保護世帯の人々は携帯電話で通知を受け取った後、指定の時間に救援物資配布地点へ向かう。ボランティアが「慈済カード」で身分確認をした後、受取番号券を発行し、これにより補助金と物資カードを受け取ることができる。



チームは全て二十歳から四十歳までの青年であった。これは慈済の世界では珍しいことである。

私たちが十一月二十四日早朝六時に飛行機で到着し、二十七日深夜十時過ぎにマナヘル学校を去るまで、ボランティアたちは絶えず付き添い、世話をしてくれた。多くがマナヘル学校の教師や職員で、彼らはいわゆる「職志合一」の人々である。

周囲の役に立ち、人生が充実していく

現在トルコでは特別貧困世帯、一般貧困世帯、アルバイト学生、大学生補助な

ど、六千世帯以上に慈善支援を行っている。以前は場所が限られていたため、一度に百世帯余りしか配付できなかったの
で、一ヶ月のうち半月余りは救援物資配付にかかりきりとなり、ようやく当月の物資配付を終えたかと思うとまたすぐに翌月の物資配付に取り掛からなければならなかった。

近年、物資配付場所をマナヘル学校へと変更し、一度に約六百五十世帯に物資配付を行うことができる。物資配付の回数は減ったものの、短時間で受け取りに
来た人々に対応するには科学技術を利用する必要がある。膨大な慈善支援の個別

案件を管理するのは優秀な情報システムである。今回、胡光中師兄は私たちへの説明のため、データベースを設計したバセル (Basel) 氏を特別に招いてくれた。

このシステムは補助金を受け取る六千世帯余りの日時を割り振り、生活保護世帯の人々の携帯電話にメッセージを送信する。生活保護世帯の人々が慈済カードを持ってやって来て、カードのバーコードを読み取ると紙が印刷され、そこに受取窓口が表示される。受取名簿の指定のページに指紋押捺し、受取が完了した後この紙を回収して廃棄すれば、誰かが二重に受け取ることを防ぐことができる。

施療センターのカルテシステムから慈善支援の個別案件システム、更に現在はマナヘル学校教師の勤怠管理システムまで、全てバセルが一人で開発した。二十九歳の彼はシリアの首都ダマスカスの出身である。台湾ボランティアチームの高大正師兄は、「通常こうしたシステムは、一般企業では外部委託で開発されます。『一人』でやり遂げるとは驚きです」と話す。

「一つ一つ試し、じっくり研究し、修正を重ねた結果です」、バセルは謙虚にこう話す。以前ある会社が高給で彼をスカウトしようとしたが、しかし彼は慈済



● 救援物資配布場所で、シリア人のチュマ (Cuma) 教授が現地の人々と言葉を交わす。彼は長年トルコの慈済人と協力してシリア難民と子どもたちを支援している。

に留まることを選んだ。「人が仕事をするのは安らかで快適な生活を送るためです。今は慈済の活動に参加できることが、私にとって最良の生活です」、バセルは言う。

千年前の魂の邂逅

マナヘル学校は、今回私たちのトルコでの活動の主要な場所となった。二ヶ月前、現地の教育局の政策の変更のため、この学校は運営危機に瀕した。子どもたちは学校を去りたくないと泣いたが、二ヶ月

後、チームの努力と不思議な因縁により、

私たちは国際教育機関の認証を得ることができた。子どもたちは安心して学習を継続できるだけでなく、将来はこの学校の証書を以て別の国でも進学できるようになった。現地のボランティアは、子どもたちに笑顔の種を蒔いてくれた慈済人の努力に心から感謝していると話した。

学校で救援物資配付を行っている時、教師と生徒が掃除をしている光景をよく見かけた。階段を上っていると、前にいる教師が突然かみこむことがあった。些これは紙くずを拾っていたのである。些細なことから誰もがこの学校を愛し、自分の家と同じように大切にしていること

が感じられた。

学校で私たちがサポートを必要とする時はいつも現地のボランティアたちが積極的に協力してくれた。台湾とオンライン会談を行う前日、私と同僚の瑩芝は各階を見回って接続に適した場所を探し、最終的に三階の中庭に決めた。必要なプロジェクター、机、椅子、延長コードなどの機材や設備を運び込む時、近くにいた人に声をかけるとすぐに協力してくれた。見知らぬ相手でも、要望を伝えるとすぐに応えてくれ、「自分の担当ではない」、「分からない」と言われることはなかった。接続のテストをしている時には熱いお茶を入れてくれさえした。



学校の開幕の前日にも同じような状況があった。「開幕」という概念は現地にはなく、私たちは赤い布で銘板を覆い、ひもを引っ張って下すのだと説明した後、ボランティアたちは準備を始めた。胡光中師兄が、当日は日曜日のため、休業する商店もある、もし赤い布を買うことができなかったら青のテーブルクロスでもいいか、と私たちに相談してきた。私たちはもちろんそれで構わないと答え、開幕は皆で祝賀するという一種の象徴で、もし形式的に難しければ無理をすることはないと伝えた。胡師兄は現地のボランティアがきつと何とかするので大丈夫だと言った。

夜七時過ぎ、ほとんど休む間もなく行われた一日五回の救援物資配付を終え、私たちが学校を去った後、現地のボランティアたちが翌日の開幕作業の準備に取りかかった。翌日朝八時過ぎに私たちが学校に着くと、銘板の上に赤い布がはためていた。そこで私たちはもう一人の「大丈夫」師兄と全力で使命を果たすボランティアチームに出会った。

シリア人のボランティア以外に、トルコ現地のボランティアも重要なサポートを提供してくれた。カイセリ県(Kayseri)のアリ・ウスラマズ(Ali UsIamaz)副知事は以前私たちの志業推進に全力で様々な協力を行ってくれた。今回は台湾

チームを出迎えるため、深夜二時の飛行機に乗ってカイセリ県からイスタンブールにやって来て、早朝六時の飛行機で到着する私たちを空港で待ってくれていた。

数日の救援物資配付、学校の開幕、無料医療センターの訪問から最後の晩のボランティアの集まりまで、アリ副知事は全ての行程に参加してくれた。副知事はトルコ語は分かるがアラビア語は分からないのだと後になって知ったが、しかし今回の活動においては、シリア人が多数であったため、ほとんどの場合中国語とアラビア語の通訳しかなかった。アリ副

●救援物資配付は毎回『コーラン』を唱えてから開始される。

知事は、言葉が分からなかったにも関わらず、辛抱強く全ての活動に付き添ってくれていたのだ。

證嚴法師に対する尊崇でないとすれば、なぜこのように謙虚になれるのだろうか。「私たちの魂は千年前に出会っているのですよ。だから言葉が通じなくても、心が通じ合うのです！」アリ副知事のこの言葉が全てを説明している。

八千キロの彼方から希望を運ぶ

車中、皆で過去の経験を語り合っている時、高雄の張明煌師兄は、「自分は台

からの愛は法師と対面する時、相互に通じ合うのである。

シリア人ボランティアは難民という身分のため、台湾に来ることはできない。しかし私は彼らがいつか法師と会えなかった時には、きっと悲心と善念の共振があるに違いないと信じている。あるボランティアは『コーラン』にある様々な良い徳行は、慈済人の行動に現れていると話した。これは宗教や民族を超えた共通の言葉なのだ。

ボランティアに限らず、支援対象者と触れ合う際にも、彼らの誠と情を感じ、愛の波動と伝動を感じた。救援物資配付

湾で和気隊長を担当していますが、人々を組織し、人々に仕事を担当してもらうのは簡単なことではありません。胡光中師兄がボランティアたちをこんなによく組織しているのは素晴らしいことだと話した。

私は年末に台湾にやって来た海外ボランティア認証チームを思い出した。メキシコ、ホンジュラス、シント・マルテン、モザンビーク……各国のボランティアたちは数千キロの距離を超えて台湾に来て精進するのだ。こうしたボランティアたちは台湾の慈済人とは宗教も民族も言語も異なるが、その純粋な心と真心

初日、私たちが《家族》という曲の手話を披露していると、突然ある女性が舞台上がって来て、如意師姐スージーを抱きしめた。救援物資配付を何度も経験している如意師姐も思わず涙をこぼした。感動がその場にいたあらゆる人々を包み込んだ。

イスラム教徒の女性はスカーフを巻き、保守的であると思っていたが、実際は彼女たちはとてもはつらつとしていた。女性向けの救援物資配付では子どもを連れて参加する人が多いため、にぎやかな雰囲気だった。比較すると男性向けの救援物資配付は「厳粛」であったが、感動的なエピソードも少なくなかった。



●「マナヘル国際学校」低学年児童が、歌とダンスで台湾からの「慈済家族」を歓迎してくれた。かつて戦火を経験したこれらの子どもたちは、もはや家計を支えるため廉価な労働力として働く必要はなく、学習を継続することができる。

「以前、シリアはレバノン、パキスタン、イラク、イエメンなどの難民を助けてきました。しかしシリアに内戦が発生するとこうした近隣諸国は私たちを見捨てました。八千キロの彼方の台湾人が助けに来て、希望を与えてくれるとは思いませんでした」、と皆の前でこう話す人もいた。

彼らは感動を言葉で表すだけでなく、竹筒歳月募金への協力という実際の行動

でも表してくれた。私たちが持って行った三十二個の大きな竹筒の募金箱は、翌日の午前中には一杯になった。腕時計を慈済へ寄付したいと言う若者もいた。バレンタインデーに妻からもらった、彼の身の回りで最も高価なものであるが、それを寄付することで慈済への感謝を表したいのだと言った。

心が大きければ同を求め、心が小さければ異にこだわる

今回の行程において、イスラム教がいかに現地の人々の生活に深く根ざしているのかを感じた。毎日定時に祈りの声が響き、

救援物資配付中であっても、礼拝の時間と場所を確保する必要がある。家庭訪問した際も、生活保護世帯の人々は、私たちとの対話を終えると必ず「アッラーの恵みがありますように」、「神が私たちを助けてくださいますように」と口にした。

家庭訪問で、マナヘル学校の六歳の女の子と出会った時に、私たちは歌やダンスなど、学校で習った事を披露してほしいと頼んだ。すると女の子は『コーラン』を唱えると言った。唱え始めるとそばにいた四歳の弟も加わり、一字も漏らさず暗誦した。子どもからお年寄りまで、コーランは生活の重心なのである。

トルコの学校に就学している多くの子



どもが、休日にはマナヘル学校に来てアラビア語を学んでいる。コーランはアラビア語で書かれているので、自分たちの国と宗教を忘れてはならない、と彼らは言う。

私はトルコで、ボランティアチームとともに高僧伝『智者大師』のフィルムを見て学ぶことを思いついた。当時まだ沙弥であった智顓大師は、異なる宗派の者

同士が互いに非難し合っているのを聞いて、「なぜ皆人々のためを思い、解脱を目指すしないのだろうか？花園の中のたくさんの花のように、それぞれ美を競っていても、上下や尊卑の区別はない。区別がなければ是非もなく、仲睦まじく付き合うことができるのに」と嘆息したという。

トルコで仏教徒の慈済人とムスリムのシリア人がこんなにも睦まじく互いに助け合うのを目にし、私はこれこそ法師の言う「宗教同士は小異を捨てて大同につくことです。心が大きければ同を求め、心が小さければ異にこだわります」という言葉の最良の証明であると感じた。

私たちが今回、トルコでの活動でできることは多くはなかった。現地のボランティアだけでも救援物資配付を行うことはできた。だが、台湾と世界各地から来た慈済人の無形の愛を私たちは身をもって伝えることができた。私たちにできることは、架け橋となり、より多くの人に遥か遠くの地域に、私たちの愛とサポートを必要とする人たちがいることを知ってもらうことだ。

（慈済月刊六二六期より）

●台湾慈済ボランティアは2018年11月下旬、シリア貧困難民のための毎月の救援物資配付活動に参加した。長期的に取り組むシリア人ボランティアとの集合写真。

「マナヘル国際学校」開幕

◎文・張庭涵、彭鳳英 訳・黒川由希

二〇一五年初頭、慈済はトルコのスルタンガージ市政府、シリア難民教師と協力して「マナヘル難民学校」を設立し、以降三年間で三千名のシリア人生徒を受け入れてきた。慈済トルコボランティアの胡光中、周如意、余自成の三人は、生徒が進学のための学歴を得られるように奔走し、アメリカ教育機関の認証を獲得した。「マナヘル国際学校」は、二〇一八年十一月二十六日に開幕、始動した。

慈済はトルコ国内で唯一シリア難民の児童の教育を支援しているNGO組織である。「マナヘル国際学校」はまたトルコ初のシリア母語教育を行う私立学校でもある。小

学生から高校生までが学び、校舎には教室五十室がある。

胡光中は、この学校はシリアの人々にとって教育機関であるだけでなく、許しと愛を学ぶ癒しの場でもあり、シリアの教育関係者に知識を伝え、シリア文化の根を守る場でもあると話す。

マナヘル学校創設者の一人―シリア人のチュマ教授は「数ヶ月前までこの学校はもうなくなるのだと思っていたのに！」と興奮した様子で話す。しかし彼はアリ副知事の「今の時に地震が発生したとしても後悔することはありません。最後まで支援し続けます」と

いう言葉を忘れることはできない。学校を継続できることになり、「自分の魂と生命をマ

ナヘル学校に捧げます。この学校は復活を表しているのですから」とチュマ教授は言った。

祝福に駆けつけた慈済基金会副執行長の劉効成は、こう話した。「一人ひとりの子どもたちはシリアの未来の希望であり、世界の希望です。この学校を支援してくれた全ての人に感謝します。愛によりトルコ人、シリア人、台湾人が一つになりました。信頼により、私たちは互いに協力し、助け合いました。全てのシリア人を支援することはできませんが、子どもたちの心に愛の種を蒔いたなら、いつか彼らがシリアへ戻った時、あるいは世界のどこかへ行った時でも、助けを必要とする人に対し、支援の手を差し伸べるに違いないと信じています」。



華僑から見たマレーシアと台湾の絆

マレーシア華僑の心・台湾人の温情(上)



クアラルンプール・シティー・センターの屋外広告に紹介されている台南の名物屋台料理。ここぞとばかりにマレーシアの人々に台湾の観光と美食文化を宣伝している。マレーシアの華僑と台湾の人々は同じ言葉を使い、同じように祝祭日を祝う。離れた土地で過ごしていても、

「文化」という一本の細い糸でお互いが強く結ばれ、切れることはない。

文・頼英綺（経典雑誌） 撮影・安培渾（経典雑誌） 訳・惟明

月

光の下、子供達はランタンを嬉しそうに持って遊び、大人達はマレーシアで無形文化財に指定されている二十四節気太鼓の演技を楽しんでいる。もうすぐ中秋節なので、人々はランタンを手にし、その晩のイベント「老街走月」（月見をしながら古い街並みを散策するの意）に参加するために、クアラルンプールの中心部にあるブタリン通りに集まった。華僑がクアラルンプールに移住した当初はこの界限に集中して住んでいたため、屋根の上の瓦から食卓の上のご馳走まで中国色が濃いので、中華街と呼ばれるようになった。

ようになったのは、十九世紀に遡る。当時の清朝政府は内憂外患に直面していた。国内では太平天国と白蓮教による反乱、海外からは英仏諸帝国に侵略されて社会が動揺し、民衆は苦しい生活を強いられていた。中国の東南沿岸地域に住んでいた住民は生計の為に海を渡って南洋に移住した。その人達の大半は苦しい生活をしてきた農民で、高い船賃は無論のこと、己れの生活でさえまともに維持できていなかった。そのために、大英帝国に身を売り、植民地開拓の労力として「ブタの子」のようにマレーシアに運ばれてきたのである。

「マレーシアの華僑は客家、廣東、福建、潮州、廣西、海南と異なる地方からやって来ましたが、それぞれの方言で受け継がれた異なる文化と風習は貴重で大切な財産であり、華僑文化を豊かにしています。このイベントを通して、それぞれの方言にもっと感心を持つよう人々に呼びかけ、華僑と他の民族との交流を促していきたいと思っています。華僑による民俗舞踊の披露の他、マレー系とインド系の舞踏団も招きました」とイベントの主催者である郷音館の館長張吉安が言った。

華僑が本格的にマレーシアに移住する

海外に移り住んだ華僑の中から身売りの借金を全額返し、運良く故郷に錦を飾れたのは少数だった。大方は戻れず、そのままマレーシアに居着いてしまった。移民の社会は通常血縁や地縁によってコミュニティが生まれる。例えば、陳氏書院（陳氏一族の集会所、祖先を祭る家族のお寺でもある）、海南同郷会館などである。助け合い、団結の精神を発揮している。次の世代へと広がるに連れ、従来、教育熱心の華僑が教育を興し初め、学校を設置した。そこで四書五経、唐詩・宋詞等を教えることによって中国語教育と伝統文化の伝承を目指した。

弾圧を受けた中国語教育

大英帝国の植民地時代と第二次世界大戦を経て、マレーシアは一九五七年に独立したが、華僑の運命はそれで順風満帆にはならなかった。むしろ新しい挑戦を強いられた。国内ではマレー民族主義が台頭し、政府が華僑を抑圧するようになったのである。

例えば、一九六一年に、国民教育体系に所属するように中華学校の改正を求める《教育法令》を成立した。それを拒否した中華中学は所謂独立中学（以下独中と記す）になり、政府の援助は受けられず、学歴も認められなかった。そのような状況の中でも、独中は中国語教育と伝統の伝承の要塞として中国語で教育することを貫いた。「文化は

● 19世紀に大量の華僑がマレーシアに移住し、伝統的な文化を持ち込んだ。例えば、クアラルンプールのプタリン通りではドラゴン・ダンス（上写真）が催される。そこは初期の華僑が集まっていた主な場所であり、1920年には既に繁華街の様様だった。（下写真・《移山圖鑑》からデュープした）





民族の根本です。私たちの会は政府の圧力がある中で設立されました。その使命は全国の中国語教育を守り統括することです」マレーシア中華学校理事連合会総会（以下董総と記す）の理事長陳大錦の

言葉である。

学歴が政府に認められないため国内で

●郷音館創設者である張吉安は文物の収集、展覧会の開催などを通して、華僑の文化を守っている。例えばランタンは華僑が中秋節の時にランタンを手にして練り歩く習慣を物語る。

の大学進学は不可能なので、進学を望む学生は海外留学の道を選ばざるを得なかった。しかし、欧米の大学は学費が高く、一般家庭が負担できることではなかった。また一九五〇年代のマレーシアは中国共産党に対抗していたので、華僑は中国留学をすることもできなかった。シンガポールの南洋大学も一九八〇年に強制閉鎖された。中国語教育を受けた華僑は海外留学の機会が更に少なくなったのである。

●台湾に留学し、卒業後マレーシアに戻った華僑は相次いで校友会を創設し互いの感情を深めている。マレーシア留台国立屏東工科大学校友会が一例である。

しかし、丁度同じ時期、台湾に移った国民政府は海外の華僑の支持を得ようと、積極的に華僑に援助の手を差し伸べ、これらの留学生を迎え入れた。「実際、一九二〇年代から国民政府が華僑事務委員会を設け、その事務を統括しました。そのあと、華僑とその学生の面倒を見ることを国家の義務とし、更に憲法にも定めました」と僑務委員会委員長呉新興が言った。

台湾留学の日々

「一九五〇年代の台湾は戒厳令を敷いていましたが、治安が良く、物価が安い



ために、華僑の留学先として最適でした。その上、素晴らしい国学知識と学術思想を持つ学者が国民政府と一緒に移り住んで教鞭をとっていました。最も重要な点はお互いに中国語を使っていたことです。言葉の障害がなく、文化も大変似ていたのです」とマレーシア留台校友会連合総会の創会会長である頼観福が興奮を隠せずに、台湾留学の日々を思い出しながら語ってくれた。

大半の留学生は大学卒業後、マレーシアに戻って就職している。しかし、留台大学生と台湾との絆は卒業と共に切れたことはない。留学生達は各校の校友会を



設立し、交流を深めるだけではなく、マレーシア政府に台湾の学歴を認めるように働きかけた。現在、マレーシア留台国立屏東科技大学校友会やバトゥー・パハト留台校友会などのように留台総会の傘下には学校と地域別に四十五の校友会が所属している。

眩しい太陽の下、温室の中では列を成して生い茂る蔓が上に伸び、みずみずしい金色のメロンが点在している。「台湾の農業技術はレベルが高く、また屏東大は農業分野を得意としています。私は一九七九年に華僑委員会が主催した海青班（海外青年技術研修）という二年間の



●華僑は台湾からの農業と紡績の技術をビジネスに応用し、著しい成果を収めた。（右上、右下）

研修に参加して台湾に行きました」と農場のご主人兼屏東大校友会会長の馬文光が言った。「私が手にしているのは台湾製の糖分計測器です。これでメロンにキズをつけずに甘さを測り、収穫する時期を決めています」と彼はメロンを抱えながら言った。

農産業の他、台湾の紡績産業も国際的に有名だった。一九五〇年代、マレーシア政府が輸入に代わるものとして政策的に後押したのである。紡績産業は政府の保護政策で瞬く間に発展した。「七〇年

代バトウ・パハトの紡績産業は芽生えたばかりで、紡績専門の人材が不足していました。私はこれを一つのビジネス・チャンスだと思い、海青班に参加して逢甲大学で紡績について勉強しました。当時は台湾に行き、紡績について勉強するのが流行でした。バトウ・パハトの紡績産業が発展したのは、台湾が間接的に支援したと言ってもいいと思います」とバトウ・パハト留台同窓会会長の黄財旺が言った。「華僑の台湾留学は台湾の経済と貿易にも貢献したのです。帰国して創業するとまず、紡績設備と原材料を供給する素材メーカーを紹介してもらえ

るかを台湾の先生や先輩に打診しました。例えば、目の前の織機は台湾のクライアントから買ったのです」

台湾について最も印象深いことは何かと聞くと、黄財旺は少し考え込んで、ゆっくり答えた。「懐の深い人情味ですね。毎年旧暦の大晦日になると、台湾の学生は皆んな年越しのために帰省するので、我々留学生だけが学校に居残って新年を迎えます。学長の廖英鳴教授は私達のために、わざわざ学校のホールに来て一緒に年菜（台湾のおせち）を食べてから、自分の家に帰って家族と過ごしてくれたのですよ」（続く）（経典雑誌二四四期より）

慈悲と智慧とを並行させる

愛は直ちに奉仕、
細く長く続けなければならない。

◎文・釋德仇／訳・済運

困難な生活を強いられた子供たちが忘れられない

十一月二十三日にトルコに向かい、シリア難民への配付活動に参加すると共にマナハイ国際学校を訪問した台湾チームは、昨日台湾に帰国し、今日は新店静思堂で報告と共に感想を語った。

「皆さんは台中で私に出かける前の挨拶をし、台北で帰国を知らせてくれました。誠意を持ってお出かけになり、小さい子供が苦難に



立ち向かっているのを目の当たりにして忍びなく思い、離れ難い気持ちを抱えて帰国したことでしょう。シリアの内戦は既に七年を超え、難民が帰国できる日は何時になるか定かではありません。人の世は何と悲しく苦しいものでしょうか。いつも一念の無明のために、長く影響する災をもたらしてしまうのです」と上人が言った。

国が動乱に陥ってからトルコに逃れたシリア人は、以前は社会的な地位があり裕福であっても、今は全てを失っている。親と共に逃れた子供はわずかな食べ物と野宿の苦しみを味わって異郷で辛い日々を過ごし、一家の重い家計を手伝うために学校に行くこともできない。

そこで慈済とスルタンガジ市政府はマナハイ難民学校を設立し、子供たちの家庭を補助して安心して学校に通ってもらうことで将来に希望を持たせている。また、この世にはまだ無私の温かい情があることを感じてもらい、愛で以て彼らの心にある憎しみをなだめ

と共に、心に新たな愛を芽生えさせている。

「当時、支援しようと思ひ立ち、この重い責任を担ったのです。それは正しかったのでしょうか。少しずつ結集した愛がシリア難民に希望をもたらしていることを分かっていただけだと思います」。上人は慈済がトルコでシリア難民支援に力を発揮していることに関してこう述べた。最も感謝しているのは胡光中師兄と周如意師姊の夫婦、それに長期に渡って現地でケア活動している余自成師兄である。宗教と言語の隔たりをなくしてはじめて諸々の事務を推し進めることができたのだった。また、アリ副知事はスルタンガジ市長だった時に行政部門と一緒に活動を大きく推進させたが、その誠意は今でも変わっていない。そして、縁があつて学校が国際機関の認証を取得したおかげで、マナハイを卒業した子供はその学歴が国際的に認められるようになったのである。

帰国した台湾チームのメンバーは、子供たちのためにもっと何か



したいのだが数人の現地の慈済人だけでその重責を担うのは見ていて忍びないと感じている。国際災害支援では数多くの項目について詳細に把握した上で慎重に査定する必要がある、一時の熱情で大勢の人を引き連れて言語、文化、宗教、政治環境も理解していない国に出向いてはならない、と上人が注意を促した。たとえ行けたとしても何ら力を発揮できなければ、徒労に終わるのである。

「縁が成就した時に機会を逃さず、無数の愛を結集させることができれば、成し遂げられる事は多いのです。しかし、その愛が偏ったものであれば、間違った方向に使われてしまうかもしれません。私は皆さんに小さな愛でもいいから功德の海に注ぐよう望んでいます。国際災害支援はトルコのシリア難民のためだけではありません。自分たちの力量を知った上で、前進しながら縁を見計らってその力を発揮させるのです」。

「慈済はシリア難民の子供たちに溢れんばかりの愛を与えており、彼らも愛の心を発揮して社会に恩返しをしています。例えば、二年前の台南地震、そして今年の花蓮地震の時には、その子供たちは直ちに、長い間竹筒貯金箱で貯めてきたお金を全部寄付しました。金額は多くなく、甘露のように少しずつであっても、それら全てを功德の海に注ぎ込んだのです」。

「同じように、私たちは普段から大衆を招いて善行し、定期的に寄付するのです。どこそこの国だけに偏るのではなく、国際災害支援の力を絶やさないようにしていれば、どこで支援が必要になっても、その力を注ぐことができるのです。一時的に慈悲心を起こして、緊急にその力のある一方に集中させても、それは直ぐに干上がってしまいます。日頃から少しずつ結集させ、細く長く流れるようにしなければいけません。真心から出た慈悲と智慧の双方があれば、長い道のりを進むことができ、この世の災をなくして人心の傷をなだめることができるのです」。

（慈済月刊六二六期より）

主婦のライフプラン

「もしも家族の一人が慈済に参加すれば、社会の家庭問題が一つ減少するはずです」私は主婦として、この言葉はとても理にかなっていると思ったので慈済人になることを決意しました。

十数年の歩みでやっと分かったような気がします。すべてが自分のポジティブエネルギーになりました。それは大切な家族のためにもなりました。共に「生、老、病、死」という苦に向き合うことが出来たのです。

暁

の鐘に目覚め、法の香りに浸る」

證嚴法師の開示を聞き始めてから

五年近くになり、取ったノートも十六冊

になりました。それは時間を積み重ねて

できた慧命の食糧とも言えます。

「特に深い縁があるからこそ夫婦にな



●楊秋燕と陳國樑の国際結婚が長く続いているのは、心が寄り添い、志が同じだからである。

れたのです。夫婦はもと
もと同じ森に住んでいる
鳥のように、一心同体で
家庭を円満に維持すべき
です。同時に社会への恩
返しも必要であり、同じ
志を以て衆生に奉仕し、
共に菩薩道を歩むので
す」これは證嚴法師の《納
履足跡》中の開示ですが、
私はノートに書き留めて
あります。

振りかえってみれば、慈
済に入って十数年が経っ
た今、やっと分かってき

ました。それは全て自分のポジティブエネルギーとなって貯められ、仏法の勉強は自分の家族のためにもなりました。共に「生、老、病、死」という人生四つの苦に向き合うことができたのです。

初めて母となった喜びと悲しみ

「私の嫁になってくれないか」一九九二年秋、マレーシアから台湾に留学し、そのまま台湾で就職した陳国樑さんが私にプロポーズしました。

知り合って一年も立たっていませんでしたが、彼と一生共に手を繋いでいこう

と決意しました。親孝行で正直でしかも一生懸命に働く姿に感動し、私の両親もこの人なら安心できると思ってくれたのです。私たちは台湾の台南で暮らすようになりました。

結婚して二年目に、新しい命を迎えましたが、初めて親となった私たちの喜びは数時間続いただけでした。女の赤ちゃんの泣き声がひどくなり顔色がみるみるうちに黒くなっていく様子を見た医療スタッフは、すぐ大病院に転院させて精密に検査すべきだと主人に告げました。

私は子供を生んだ後で麻酔のため意識がまだはつきりしておらず、小さい命が

すでにICUに搬送され緊急治療を受けていたことも、先天性肺動脈狭窄症という病気ゆえにすぐ手術を受けなければならなかったことも後になって知りました。「千人に一人の発生率で、生存の可能性は五割ぐらいです」と医師に言われた時、この事実が信じられないほど心が痛み、気落ちしていました。

治療中、主人と私は何度もお寺に参拝し、娘の病気が治るように神様をお願いしました。泣き暮らしていた私を見て主人は、「娘はもしも私たちとの縁があれば、きつと生きてくれるはずだ。もしも縁がなければ、神様が彼女を自分の元に

連れて行くから。私たちに今できることは、医師を信じて、保育器にいる娘に張りなさいと励まそう」と言って私を慰めてくれました。

二か月の苦しみを経て娘の病状がやっと落ち着き、一般病室に移されたのですが、更に観察と治療を受けることになりました。

当時、近くの湖内郷に住んでいたおばさんが慈済の委員で、娘の見舞いに来てくれました。彼女は「子供は二つのタイプがあって、一つが恩返しに来た子で、もう一つが親を修行させるために来た子ですよ。」と教えてくれました。私は娘

の痛みが軽減するようにと、娘の代りに誠意で以て善行し、毎月慈済に寄付するようになりました。

私を娘のように可愛がってくれた姑

二〇〇一年、長女は幼稚園の四歳児クラスに、次女も三歳児クラスに入りました。その年慈済では世界的に「一人一善をすれば災難を遠ざけることができる」という理念を推進し、私も「愛を世に撒き、福田を耕す」活動に参加していろいろな方に呼びかけ、善念と寄付を募りました。その頃聞いた證嚴法師の開示のいくつ

女性の美德を広めていくべきです」。このような観念は私に姑のことを思い出させました。

幼い頃、私の両親は仕事の関係でいつも家を空けていて、雨の日だけ顔を合わせていました。家事の事も減多に教わることはなく、嫁に行くまで食事の支度は全くできませんでした。

マレーシアの姑は、私の苦手を知ると時間があればすぐ台湾に来てくれて、自分の息子に故里の料理が食べられるようにし、ついでに私に料理と住まいの掃除も教えてくれました。

姑は身を以て私に教えました。も

かが深く印象に残りました。例えば、「もし家族の誰かが慈済の活動に参加すれば、社会の家庭問題が一つ少なくなるはずです」。

そして「過去の時代にはかまどと煙突が家庭生活を表し、煙が出ていればその家はご飯を炊いていることを表していました。現代は高いマンションばかりでレストランも多くなり、何かにかこつけてはすぐレストランへ食事に行きます。私たちは昔の安定した生活に戻るべきです」。

また「女性は家庭を左右するとても大切な立場にあり、その言行は国にも影響を与えるほどなのです。これから一層

しも一家の主婦が家事さえもできなかったら、子供たちもそれを真似し、大きくなっても当然家事ができないのかもしれないかもしれません。

私の心の中で彼女は立派な母親でした。いつも子供たちのために働いて、どんな事が起こっても子供たちの立場に立ってくれました。当時姑と二人で一緒に食事の支度をしていたことを思い出します。姑は食材の買い出しに、私は食材を洗ったり切り分けなどをしました。彼女が料理を作るとき、いつも横にいる私に味見をさせてくれるのです。二人の心は通じ合い和やかでした。



●楊秋燕は1992年に台湾在住でマレーシア籍の陳国樑と結婚した。長女は心臓病を持ってこの世に生まれたが、国際結婚の夫婦はこの困難に遭って学んだことが多いと言う。2人の娘を育てる中で自分の実家に助けをもらい、また主人の大家族にも可愛がられた。

姑はよくマレーシアと台湾を往復して

くれました。自分の得意な料理を私に伝えたかったのでしよう。今では恩返しすることもできず、舅や姑のために料理を作って食べて貰うこともできないので、おもてなしが実現できなくなったのが残念でなりません。

主人が大学を卒業した年、姑にガンが見つかりました。彼女は直ぐにガンに立ち向かうため医師の言う通りに積極的に治療を受け、ポジティブな考えを保っていました。十数年間の抗がん治療の甲斐もなく、二〇〇四年の初めにがん細胞が全身に転移し亡くなりました。五年後、舅も

同じようにがんでこの世を去りました。

記憶に残っていますが、姑は最後に台湾を離れる時、飛行機に乗る前に突然「私の代りに息子の面倒をみてください。二人の孫のことも」と私に言ったのです。その後、姑はマレーシアに帰ったまま、再び台湾に来ることはありませんでした。

舅と姑が危篤になった時、縁があつて、マレーシアの慈済人からお見舞いや励まし、温かいケアを頂きました。皆さんにお経を唱えてもわなければ、台湾に住んでいる私たちは安心できなかったでしょう。二人のお年寄りには既にこの世におりません。私をまるで実の娘のように愛して

くれた様々な思い出が、今でも私の心に深く刻まれています。

主人の心ゆかせのために

姑が生きているうちは中国古来からの伝統文化である「七つのマストアイテム：柴、米、油、塩、醬、醋、茶」にあるような一家の主婦がすべきことを十分に果たしていましたが、私は茶道だけ姑から学ぶことができませんでした。

中国の伝統文化には、新婦は結婚の翌朝必ず舅姑に顔を洗う水とお茶を捧げるという習慣があります。当時の私は緊張

しすぎて、気付いていないうちに、「嫁の壺」という嫁いり道具を床に落として壊してしまいました。

これはよくない前兆だと思われ、姑は大変怒っていました。舅は私を助けるため「歳歳平安、歳歳平安（碎と歳の発音が同じであるから、毎年健康かつ無事でありますように）」と言ってくれました。それで、私は二度と茶壺を触ることがないまま過ごしました。

姑が亡くなった半年後、主人は姑を思い出していつも一人で黙ってお茶を飲んでいました。私は主人の悲しみを一緒に分かちあいたいと思いましたが、どうし

たらいいのか分かりませんでした。もしもお茶を飲んで親を失った悲しみが和らぐのならと私は考え、茶壺の苦い思い出を乗り越えて慈済の茶道コースに入り勉強することになりました。

思いがけず「静思茶道」はお茶の入れ方と飲み方の作法を学ぶだけでなかったのです。そのコースの主旨は、證嚴法師の《無量義經》を慈済の精髓に取り入れることです。茶道の先生は仏教の経文を教科書にして指導し、実践を目標にしているそうです。お茶のことも経文にも触れたことのなかった私にとってそれはとても難しいことでした。しかし私は毎日

主人に美味しいお茶を楽しんでほしい一心で通い続けました。

「人の母、妻、嫁として料理と家事をするのは当たり前のことです。裁縫のほか、料理、茶道、生け花などをしっかりと学び、主婦の役割を果たしてください」と證嚴法師は開示の中でも茶道のことを語られています。主人にお茶を入れるのも家庭主婦の役割としたら、心の底では思い出したいくない茶壺の事も、無明の煩惱として取り除くべきでしょう。周りに影響されずに茶道に専念し、清らかな心で淹れたお茶はきっと美味しくなるはずだと思うからです。

心を込めてお茶を入れることができるには、自分でやってみて学ぶことが大切です。茶道から初めて仏法に触れましたが、《無量義經》の教えでは、お茶をいれる時は純粹に素朴な気持ちで全ての細かい作法を守ることを心がけ、その中から「布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧」という「六度波羅密」を見出すのだそうです。お茶を入れる時にこのような考えで行えば、茶道の心境を体験できると学びました。

お茶を入れることが好きになったので、いつも自宅近くの慈済道場で近所の人や慈済人とお茶で縁を結んでいます。

なり、とうとう私のことさえも分からなくなっていました。

「人生の価値とは何でしょうか。世の中にはなぜ生、老、病、死の苦があるのでしょうか。なぜ愛情、別れ、憎しみの苦があるのでしょうか。なぜ貧、富、貴と貴賤の苦があるのでしょうか。なぜ苦しみはこんなに多いでしょう」再び證嚴法師の開示を振り返って考えるとやっとその道理が分かりました。

母がいつも私のことを気に掛けてくれたのは、一緒に家を守ると約束したからです。彼女は慈母の役割を果たすためずっと私に付き添って、私が娘を生んだ時、

人と触れ合ううちに、《法華經》をよりはつきりと理解できるようになりました。特に実家の母が病気になった時は、一層深く經典を理解したい気持ちがつのりました。

勇気を出して母に別れを告げる

それまでどんなに大変なことがあっても、実家の母はいつも私の後ろ盾となってくれましたが、彼女がいなかったらどうしようという事は一度も考えませんでした。兄が急に心筋梗塞でこの世を去ると、母は兄の事ばかり考えて、体も弱く

病院で娘の看病している私を、母は心配して産後の養生に気を配ってくれました。

「人のお産は簡単そうに見えるのに、なぜかあなたのお産は九死に一生を得たみたいに産後も病院で過ごすことになってしまったのね。女にとって産後の養生はどんなに大切なことか」と心から心配してくれました。

その後、母の病気で付き添っていたときに、突然無力感に襲われ、心身ともに疲れ果て、「もつといい法はいつたいどこにあるのでしょうか」と自分に問っていました。

挫折は即ち修行です。悲しいことに手

の施しようがないと分かったとき、私はようやく母の「緊急治療を放棄する同意書」にサインし、「緩和ケア」を受けさせました。それから彼女の容態はだんだん下り坂となり、仏法だけが私たち親子の心を慰めてくれました。

二〇一四年七月二十二日、この日は證嚴法師が行脚のあと病に倒れ、治って初めて講堂で《法華經》を解釈する日でした。私と主人はその日から「暁の鐘に目覚め、法の香りに浸る」説法を聞き始めましたが、生中継で慈濟人に語りかける法師の声はまだかすれていたのです。当時の私は涙が止まらず、證嚴法師の教え

がずっと忘れられませんでした。

ある日、やっと勇気を出して母に「お母さん、もしも疲れたらゆっくり眠ってください。私たちは良い子になるから、安心してください。もううちの事を心配しなくてもいいですよ。お母さん、もしも疲れたら、ぐっすり眠ってください。慈濟の尼僧たちは慈悲心があるから、これから人としての道理を教えてください。から安心してください。もう家の事を心配しなくても大丈夫ですよ」と別れの言葉を言うことができました。本当は辛くて諦めることなどできませんでした。最後にやはり母の手を放しました。

楽しいとは言いが少ないこと

三十二歳の時から慈濟に入り、この

十八年間に身内の者が一人一人離れていつて、生、老、病、死は自然の法則であることが身に沁みました。これが仏法を探



● 静思茶道を勉強した楊秋燕は、「心のお茶を飲んで、心の法を伝えよう」と考えて近所の人たちを招き、3割を茶道体験に、7割を證嚴法師から習った仏法の教えを分かち合う時間にして皆に伝えている。

求する機会になったとも言えるようです。受け入れれば悟りとなり、受け入れなければどう向き合えば良いのか分からないままです。

二〇〇八年に茶道師範の認定試験に参加しましたが、二度目も不合格でした。この年に左足を骨折し、ボランティアの奉仕にも暫らく参加できませんでした。怪我の回復中、夫婦で人生最大の試練を迎えました。主人の友人が金融危機で破たんしたのです。その友人にはお世話になった恩があったため、私たち夫婦はやつと手に入れた家売り、彼に資金を支援しました。実家の父は心配のあまり

私を叱りました。

家でお金に換えられる物を全部売ってしまった。まだ友人を助けられないほどでした。親友や慈済人から「なぜ借家に住んでいるの？」と聞かれたり、娘からも言われました「クラスメートに聞かれたの。うちはこんなに貧しいのにお母さんはよく笑顔でいらつしやるのね」と。彼女には理解できなかったようです。

「人は水を飲むが如く、冷暖を自ら悟る」。その時ちょうど證嚴法師が「清貧致福（素朴な暮らしに福をもたらす）」を呼びかけた年でした。私たち夫婦は人が言うことを気にせず、慈済への奉仕も

放棄する気はありませんでした。友人へ恩返しをして例え彼の事業が挽回できなくても、仕事が無くなることはないし、ゼロから再スタートすればいいと思っています。

最初の借家に引っ越した時、よく昔買った家の夢を見ました。あるとき、證嚴法師が大勢の慈済人を連れて私の借りた家に来てくれた夢を見ました。「この家は買った家ではなく借りた家です。」と證嚴法師を室内に案内しながら事実を言いました。「借りた家でも買った家でも、住めるのであれば、どちらも自分の家と言えます」と證嚴法師がお答えになったのです。

その年、夫婦二人でお茶を飲んでいて、心に響いた静思語があります。「人生の喜びはたくさん物を持つことではなく、人との言い争いが少ないことだ」という言葉です。本来お茶が余り好きではなかった長女もそれから関心を持つてくれて、今では家族一堂集まって喜怒哀楽を分かち合っています。

毎朝起きて法の香りに浸った後、私は家に戻るとまず茶の水を沸かします。特に寒い冬にガスの火を付けると、家が暖かくなるのを感じます。次に子供が起きて、朝食の支度も出来て、皆で楽しく一日を迎えることができます。

茶葉と法水との出会い

二〇一六年七月五日、私のノートにこんなメモがありました。證嚴法師が涙にむせび、開示が言葉にならないほどだった日です。「世の中の米俵を担ぐのはそんなに簡単ではなく、非常に辛いことです。心から仏法を勉強するには、如来の定と慧を持つことです。現在の人々は周りの意見が多すぎるので、どこに向かうのか迷ってしまうのです。」と。私たちは如来の肩や背中に背負われているうちは、その辛さがまったく理解できないのだと證嚴法師はおっしゃっているのです。

「何か少しでも逸れた面が見えると全部が誤解されてしまいます。人々にもしも私たちのすることは善だと解釈してもえなければ、慈濟全体の過ちとなってしまうのです」。證嚴法師は慈しみをたたえる母のように、弟子たちにいつも心がけるよう励まされました。

その日はいつもの通りに法の香りに浸った後、ボランティアに出かけましたが、特に足どりが重く感じられました。私は「静思茶道」で社会奉仕するという道を選んだのだ、それは家族にも祝福されているから、十年一日と考え、どこかで私が必要とされれば、すぐ慈濟委員の

制服に着替えて喜んで奉仕に行こう、そう思い直しました。

五十二年前の慈濟は、三十名の主婦が毎日五十銭を貯めて気持ちを一つに、買い物かごを提げ、世の役に立つことを約束したのです。五十二年後の現在、私もその家庭主婦たちと同じです。違うのは、茶器入りの青いかごを提げ、慈濟の各道場に行つて、慈濟人や一般の人々に自分の茶道体験を分かち合いながら仏法への心得を伝えているという点です。

その三十名の主婦の姿がいつも私の心の中にあります。私は彼女たちの隊列に参加するのは間に合いませんでしたが、

今、あたかもその隊列と共に歩いているような気がします。

證嚴法師に感謝します。苦勞を一言もこぼさず、《法華經》を生活に密着した形で解釈し、中期の私たちがそれを日常生活に取り入れられるよう分かりやすく、難しい經文を目にして拒否と恐怖を抱かないように講義してくださったのです。私と主人はこの五年間、毎朝「曉の鐘に目覚め、法の香りに浸る」説法を聞き続けてきました。ネットを通じてはいませんが、證嚴法師と弟子の間の愛は繋がっているのです。

「昔、どうして『静思』と言う名前を



●2009年8月台風モラコット（台風8号）が過ぎた後、陳國樑一家は被災地に行つて清掃を手伝った。

付けたのかというと、いつも『静かな心で思考する』と人生の道をよく考えることができるからです。『静思』と言う冷静な考えがなかったら、間違ったことが発生しやすいのです。ですから人々は落ち着いて考えた後に行動すべきなのです」と證嚴法師は語られました。

私が茶道師範の資格を取ろうと思ったのは、そ

れが慈済で奉仕できる道だと考えたからです。現在、茶道コースの授業がスムーズに行われているのも、その背後には證嚴法師の支えがあり、教えを頂いたのだと私は思っています。

青いかごを提げ、いつも柔和忍辱衣を着て、四季の移り変わりあるいは風雨の日にも変わらず、證嚴法師の期待を心に、仏のために塔を、または僧侶の住まいを建てるように礼儀を弁えて群衆に分け入るべきです。

仏塔を建てる者の志を胸に、仏の化身であるかのように振る舞うこと、これが自分に対しての期待です。仏法を現代に

取り入れるときは茶葉を人に見立てます。「処世は茶道に似ている。茶葉を見てお茶を入れることが大切だ」、「お茶を入れる前、まず人の作法を見ることが大切だ。」茶葉は法水と出会った時、その生命は再び輝きだします。それは茶葉の最後の再生の時でもあります。そして茶葉は自身の本質と特色のすべてを心ゆくまで發揮して、最高の味を導きだすのです。茶葉に情があつて、入れたお茶に愛があつて、情と愛の両方を兼ね備えたお茶は、證嚴法師の法があるからこそ、その人情味を發揮できるのだといえます。

（慈済月刊六二二期より）

【證嚴法師のお諭し】

◎訳・慈願 絵・陳九熹

好いことは待てない 了解したら 即刻実行 すること



間違った行いは即刻やめるべきであり、
自分を見失ったままではいけない。
一度見失うと道に背いたまま行ってしまう。
人を利するべき善事は即刻行い、一秒も浪費してはならない。

新 暦の正月が過ぎ、旧暦の正月が
近づくこの頃は全台湾を行脚し
て、歳末祝福会と認証授与式を主催し、
福と慧を皆さんに届けて祝福し、真心
こめて新しい一年が平安福慧の年であ
るよう祈ります。

去年は世界各地で災難が頻発しまし
た。去年末ポーランドで国連気候変動
会議（COP）が開かれ、各国代表は、

工業の高度発展によって大気が汚染し、
気候変動は既に極端な状態に達し、自
然災害は益々酷くなると認めました。
今一番恐れているのは地球の温度が更
に高くなれば、氷山が溶け、海水が上昇
して想像を絶する状態になることです。

どうすればこの危機を乗り越えるこ
とができるでしょうか？工場が排出す
る二酸化炭素を削減して、環境保全を

重視する必要があります。会議の中で百以上の国が共通の知識と認識を持っているのですが、共に行動することができないのは、国家の利益として工業の発展が必要だからです。環境保全を推し進めるべきではあっても、達成はとても困難なのです。

慈済は環境保全の重要性を理解し、認識して実践しています。ボランティアは実地体験を話し、地球温暖化をくい止めて災害を減らす最も良い方法は環境保全と素食だと言っています。

二十数年前環境保全を呼び掛けた時、皆が私が何故ゴミを重要視していたの

で救済に使えるのです。これらの物資はボランティアの手によって無から有に、汚いゴミから高級な物に産まれ変わっており、感謝に堪えません。

環境保全ボランティアは智慧があつて、健康で休まず自分の持ち場を守っています。彼らが環境保全に投入する姿はこの世の清流であり、国際会議上でビデオが放映されることで、その清流が世界を駆け巡り、海外の人にも知ってもらえるようになりました。

地球上の七十五億の人口の中で、八億人余りが飢餓に苦しんでいます。人類の肉食の需要に応えるために大量

か疑問に思っていました。しかし、ただゴミを集めるのではなく、資源を回収するのです。以前のスローガンは「ゴミが黄金に、黄金が愛に変わり、愛が清流となつて世界を巡る」でした。今、回収価格が安くて誰も買い取ってくれなくてもボランティアは回収し続けると言っています。回収しなければゴミになり、燃やせば大気を汚染し、埋めれば大地を汚染し、大変なことになるからです。

しかし、回収してきちんと整理すれば、生活用品として再生したり、ペットボトルは温かい毛布になり、国内外

の動物を飼育し、汚染源を作ったり、餌や水、草を与え、そして、人類と食糧を奪い合っています。動物は狭い所に閉じ込められ、最後には人類の口の欲の犠牲になつて屠殺されます。実に残酷なことです。

地球温暖化に対して方法がないわけではありません。当時慈済は絶えず環境保全を訴えていましたが、今は環境保全が世界の重要な課題になっています。今、地球をどうやって護るか分かっているのですから、菜食を勧めなくてはなりません。

必ずしも肉食だけに栄養があるとは

限らず、欲念を克服することも修行なのです。四大元素の不調和は人類の共業から来たもので、皆が欲望のままに生活してきた結果です。現在は買物があまりにも便利になったため、人々に消費の習慣ができ、他人が新しい物を買っているのを見ると、自分には必要ないけれど買おうと思うのは、ただ欲念を満足させるためです。古い物を淘汰して新しい物に変え、物は増える一方です。

社会では物資が過剰になり、リサイクルセンター環境保全所では陶器の食器セットがそのまま届いたり、まだ開封さえしていない、包装したままの物まで捨てられているのです。また、ラベル

一旦見失うと、道から外れ、自分の蒔いた種は自分で刈り取らねばなりません。また一秒足りとも無駄にせず修行して自分を変え、この瞬間を把握して行動すればいいのです。

私は毎年毎日、人心の浄化、社会の安寧、天下に災難のないよう、という三つの祈願をしています。人心を浄化するには、この世と人心の環境保全をして煩惱を取り払い、心と精神がいつまでも清らかになり、最も価値のある宝を大切に持ち続けるのです。最も価値のあるものとは何でしょう？人生の中で最も貴重なのは善行です。

社会や地域が必要としている時、私

が付いたままの真新しい服もあり、回収所に持って来なければ新しいものが買えないのでしょうか。そして、引越したりリフォームの時には、まだ使える家具まですべて捨てられることもあります。

極端な気候変動に対して、以前私はいつも「間に合わない」と言っていたましたが、今は「待っていてはいけない」時期になりました。台東、屏東、高雄、台南と一路行脚してきましたが、そのどこでも声を揃えてお経の中の「如是我聞、如是我知、如是我識、如是我行」を唱えていました。誤ったことは即刻止め、社会を利することは即刻行動に移し、自分を見失ってはいけません。

たちに真心を以て持てる力を発揮すれば、人々に安らぎを与えると共に自分も安心できるのです。この世では誰もが果たすべき責任を持っており、見返りを求めない奉仕をして、自分に対して責任を負うべきです。自分の発願を本当にやり遂げた時に感じるのが法悦というものです。

日々の平安に感謝し、時間と空間を大切にして、縁を逃さず善行を積み重ねて福を作ること誰かが幸せになれるでしょう。皆さんが新年を迎えるに当たって諸々のことが思いのままになり、日々が目度く、菩薩道で共に精進することを願っています。（慈濟月刊六二七期より）

■ 静思語

一瞬に頭を過る善の念を大切にする

「一秒」は非常に短く、「一念」はもっと速いのです。もし、一瞬にして頭を過る善の念を逃さず実行することができれば、その一秒は永遠なものになるでしょう。



慈濟大記事二月……………

訳・済運

02・02	慈濟インドネシア支部は2018年のスラウエシ島地震被災者のために、パプ省政府と恒久住宅の建設支援に関する覚書を交わした。
02・09	9日の明け方、新北市板橋区新海路にあるアパートの5階でガス爆発が起き、5人が負傷し、近くの住宅の多くが損傷した。慈濟ボランティアは知らせを受けて直ちに慰問活動を展開し、救助人員や住民に食事を提供すると共に、病院の負傷者に見舞金と着替えや歯ブラシな

02・16	02・14	済の環境保全理念を来場者と分かち合った。 花蓮慈済病院眼科研究室は患者自らの血液と皮膚細胞から作成されたiPS細胞から「網膜色素上皮細胞」と「光感知細胞」、「網膜節細胞」を培養させることに成功し、網膜の病や視神経の損傷を修復できるとに期待が寄せられている。今回の研究成果は2019年国際学術季刊誌《Cells》に掲載される。 慈済基金会は2018年にミャンマー中南部で起きた水害に対し、台湾、マレーシア、ミャンマーの慈済ボランティアから成るチームが16日から25日までヤンゴン、バゴ、モンステート、カインステー
-------	-------	--

02・13	02・11	どの日用品を届けた。11日には安心ケア活動を行い、事故現場の近隣住民を訪ねて慰問品を届けた。 慈済大学と姉妹校のアメリカ、アンドリュー大学は学生が双方のマスターコースを同時履修できるよう取り決め、慈済大学劉怡均副学長とアンドリュー大学のアンドレアラクストン学長が合意文書にサインした。今後、学生は慈済大学の公共衛生学部マスターとアンドリュー大学のMBAディグリーを同時修得することができるようになる。 2019国際気候ショーが13日と14日にスイス・ローザンヌで開催され、ドイツ慈済ボランティアの楊済洪と林美鳳が代表で参加し、慈
-------	-------	---

02・18	インドネシア・カリマンタン州シンカウオン慈済学校の起工式が行われ、慈済インドネシア支部の黄榮年副執行長とインドネシア政府司法・人権部のヤソナラオリー部長、交通部のブディカリヤスマディ部長、シンカウオン市の蔡翠媚市長らが式典に出席した。当学校には幼稚園、小学校、中学校があるほか、中国語、英語、インドネシア語の3ヶ国語で授業を行う。	トで稲の種子を4万世帯の農家に配付する。
02・19	慈済アメリカ・ラスベガス事務所の責任者張愷倫と10人のボランティアは中華系アメリカ市民懇親会の年次総会に出席し、ボランティアのラスベガス市への貢献が認められて、Up it Forward賞を獲得した。	

02・22	花蓮慈済病院とフィリピン慈済人医会はベトナム医療視察団を結成し、22日から25日までソクチャン州とハノイ市に出向き、永州市視覚障害者村と枯葉剤被害者救済センターを訪問すると共に、関連協会を訪れて医療支援の進め方を検討する。	
02・26	慈済大学児童発展及び家庭教育学部「Yabi児童劇団」は2月26日から3月23日まで花蓮北埔小学校、富里小学校、紅葉小学校、春日小学校及び慈済大学で児童劇《デビーの救済旅日記》を巡回公演する。劇の内容は当学部の学生が「20170206花蓮地震」を支援した時の気持ちからヒントを得たもので、日頃から地震時の避難を予行演習し、冷静且つ相互扶助で以て災害に向き合うよう、子供たちに呼びかけている。	

各国の連絡所

本部

971 花蓮県新城郷康樂
村精舎街 88 巷 1 号
TEL: 886-3-8266779
886-3-8059966
志業中心 (静思堂)
970 花蓮市中央路三段 703 号
TEL: 886-40510777 # 4002
0912-412-600 # 4002

花蓮慈济医学センター

970 花蓮市中央路三段 707 号
TEL: 886-3-8561825
玉里慈济病院
981 花蓮県玉里鎮民権街 1-1 号
TEL: 886-3-8882718
関山慈济病院
956 台東県関山镇和平路 125-5 号
TEL: 886-89-814880
大林慈济病院
622 嘉義県大林鎮民生路 2 号
TEL: 886-5-2648000
台北慈济病院
231 新北市新店区建国路 289 号
TEL: 886-2-66289779
台中慈济病院
427 台中市潭子区豊興路一段 88 号
TEL: 886-4-36060666
FAX: 886-4-36021123

慈济大学

970 花蓮市中央路三段 701 号
TEL: 886-3-8565301
FAX: 886-3-8563604

台北支部 (新店静思堂)
231 新北市新店区建国路 279 号
TEL: 886-2-22187770
慈济人文志業センター
112 台北市立德路 2 号
大愛テレビ局
TEL: 886-2-28989999
静思人文
TEL: 886-2-28989888

アメリカ

総支部 (San Dimas)
TEL: 1-909-4477799
北カリフォルニア支部
TEL: 1-408-4576969
ハワイ支部 (Honolulu)
TEL: 1-808-7378885

カナダ

TEL: 1-604-2667699

メキシコ

TEL: 1-760-7686631

ドミニカ Santo Domingo

TEL: 1-809-5300972

ブラジル Sao Paulo

TEL: 55-11-55394091

イギリス

TEL: 44-20-88699864

フランス

TEL: 33-1-45860312

ドイツ Hamburg

TEL: 49 (40) 388439

オランダ Amsterdam

TEL: 31-629-577511

スウェーデン Goteborg

TEL: 46-31-227883

オーストリア Vienna

TEL: 43-1-7346988

南アフリカ Gauteng

TEL: 27-11-4503365

中国蘇州

TEL: 86-512-80990980

香港

TEL: 852-28937166

フィリピン Manila

TEL: 63-2-7320001

タイ Bangkok

TEL: 66-2-3281161-3

ベトナム Hochiminh

TEL: 84-8-38535001

ミャンマー Yangon

TEL: 95-1-541494

マレーシア

Penang

TEL: 604-2281013

Malaka

TEL: 606-2810818

シンガポール

TEL: 65-65829958

インドネシア Jakarta

TEL: 62-21-5055999

大愛テレビ局

TEL: 62-21-50558889

スリランカ Hambantota

TEL: 94 (0) 472256422

ヨルダン Amman

TEL: 962-6-5817305

トルコ Istanbul

TEL: 90-212-4225802

オーストラリア Sydney

TEL: 61-2-98747666

ニュージーランド

Auckland

TEL: 64-9-2716976

慈濟

2019年3月20日発行・267号
中華郵政台北誌字第909號執照登記為雜誌交寄
Printed In Taiwan

発行人 釋證嚴

発行所 慈济基金会

〒112 台湾台北市北投区立德路2号

編集 慈济日本語翻訳チーム

杜張瑤珍・陳植英・王麗雪

校閲 黒川章子

電話 (886)02-2898-9000

FAX (886)02-2898-9994

E-mail: 021620@tzuchi.org.tw

慈济基金会日本支部

〒169-0072 東京都新宿区大久保1-2-16

電話 (03)3203-5651 ~ 5653

FAX (03)3203-5674

E-mail: jptzuchi@yahoo.com.tw

tzuchi@tzuchi.jp

證嚴法師のお言葉、委員や会員の体験談、慈济に関するニュース等を日本の方々にお知らせする目的でこの小冊子を編集しました。日本語への翻訳は素人である私たちがしましたので、不備な点や、つたないところがあると思います。ご感想やご教示がいただければ幸いに存じます。(日文組編集同人)



最高の笑顔 竹筒歲月シリーズ

トルコの慈済ボランティアはサルタンガジ市・マナヘル国際学校で、毎月シリア難民に物資カードと生活補助金を配付し、カイセリ県（Kayseri）のアリ・ウスラマンズ（Ali Uslanmaz）副知事は難民の愛の心を募った。

副知事はサルタンガジ市長だった時、慈済の難民学校の設立をサポートし、街角で物乞いしたり、児童労働をしたりして、教育を受けられなかったシリア難民の子どもに、学校に入る機会を与えた。

（撮影・余自成 トルコサルタンガジ市 2018.11.24）



慈済ものがたり